

令和元年6月6日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02455

研究課題名(和文) ヒンディー詩論書の形成と発展

研究課題名(英文) The rhythmical construction of the Hindi and Urdu metre and its origin in Persian prosody

研究代表者

長崎 広子 (Nagasaki, Hiroko)

大阪大学・言語文化研究科(言語社会専攻、日本語・日本文化専攻)・准教授

研究者番号：70362738

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ヒンディー詩論書の中でも特に韻律学の形成と発展に着目して、17世紀のSukhdev Misraの韻律書をベナレスとガヤの2写本から書き起こし、校訂して英訳を付けた。また、韻律定義で用いられる専門用語集を作成した。研究論文として、プラークリット・アパブランシャのモーラ韻律から直接的な影響を受けて発展したヒンディー韻律が、独自の詩形(KabittとSavaiya)を作り、また現代で起こる潜在母音aの脱落で新たな音韻リズムを作り出した過程を詩論書の記述から明らかにした。また、ヒンドゥーとムガル宮廷における詩論書と韻律学の位置づけを研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古ヒンディーの詩論書のなかで韻律学についての研究は、Bhanu以来およそ100年間停滞していたが、本研究において16世紀以降ヒンドゥーとムガル宮廷の宮廷詩人がヒンディー詩論書の一部として韻律学について研究していたことが明らかになった。ヒンディーの音韻リズムの変化について日本語と英文で論文を書き、その他の研究成果も特に海外での学会と学術論文を中心に英文で発表した。また海外の古ヒンディー研究者と共同研究をすすめ、海外から研究者を招いて日本で初めての古ヒンディーとヒンディー韻律学の研究会を開催した。

研究成果の概要(英文)：Two manuscripts of the Pingala composed by Sukhdev Misra were edited and translated into English. The vocabulary of technical term used in the books of Hindi prosody was summarized.

This research especially investigated three points. The first, how the Hindi prosody under the influence of Prakrit-Apabhramsa prosody developed some original metrical rhythms such as Kabitt and Saviya. The second, the phonological change of Hindi; the loss of the short a in weak position in pre-modern Hindi brought about extensive change in the metrical as well as linguistic rhythms, and the traditional metrical scansion became no longer applicable to modern Hindi poems. The third, the importance of the study of prosody in the Hindu and Mughal courts.

研究分野：中世ヒンディー文学

キーワード：ヒンディー 韻律 詩論書 音韻 モーラ 音節

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ヒンディー文学は、現代ヒンディー語の口語文法の整備にともない散文体の文学が確立する19世紀以前は、主として韻文学であり、ブラジ・パーシャーとアワディーという2つの方言が文芸語として用いられていた。バクティ文学期(14-17世紀)の後半とそれに続く作詩法時代(17-19世紀)はヒンディー文学史上最も充実した期間とされており、思想面での研究がインド国内外で盛んになされてきた。しかしながら、現代ヒンディー語と大きく異なる初期ヒンディー語の文法は体系的に解明されておらず、内容を正確に理解するのは極めて困難である。初期ヒンディー語の文法記述を困難にしている要因のひとつは、当時の文学が韻文であり、音節数やリズムの統一を優先するあまり、破格の文法形式が頻繁に現れる点が挙げられる。そのような言語を正確に読解し内容を理解するためには、韻律の知識が不可欠であるが、ヒンディー語の韻律学の研究は極めて遅れており、ヒンディー文学研究者のなかでもその知識を持つ者も少ない。

代表者は本研究以前からヒンディー語の韻律研究をすすめており、20世紀初めにJagannath Prasad Bhanu によって著された韻律書 *Chanda Prabhakar* に基づいて詩形ごとにその規則とサンプルの朗唱の音声データをハイパーテキスト化した「デジタル詩論書」を作成した。そしてこのデジタル詩論書を一般に公開してきた(<http://hin.minoh.osaka-u.ac.jp/hindi/metre2.html>)。ヒンディー韻律にはヴァルナ(音節)韻律とマートラー(モーラ)韻律の二種類があるが、後者がヒンディー韻文ではより広く用いられる。それぞれの詩形の来歴を辿ることでヒンディー韻律の起源と変遷を明らかにし、またヴァルナ韻律に分類される「サワイヤー調」の韻律がペルシア韻律とインドのヴァルナ韻律の混淆によって成立したという研究を行い、さらに国内外のヒンディー研究者との共同研究によって、2012年にはインド・アーリア語とペルシア語の韻律について英文の専門書(*Indian and Persian Prosody and Recitation*, Saujanya Publications, 2012)を編集出版した。こうした研究の中で、インドの研究機関や現地の研究者が所蔵する写本を参照してきたが、内容の研究を優先していたため、これらの写本を直接の研究対象とはしてこなかった。しかし集めた写本には17世紀から18世紀のヒンディーの韻律書も含まれており、これらはインドで出版されたヒンディー語の論文中で紹介されているものの、1点をのぞき校訂も出版もされていないものであった。これまで研究されていないことにくわえ、これらは、ヒンディー韻文を受容してきたインドの詩論家たちが、韻律をはじめとするヒンディー詩の規範をどのように理解していたかを知る上で、極めて重要な資料である。

2. 研究の目的

本研究では、ヒンディーの詩論のなかの特に韻律論の成立と発展過程を研究する。代表者がこれまで収集したヒンディー詩論書の写本を中心に、写本を通してヒンディー詩論の成立と発展の解明をすることが主たる目的であるが、そのために以下の3点を具体的にを行い、その問題点を解明する。

(1) ヒンディー詩論書の校訂：

ヒンディー詩論書のなかでも17世紀から18世紀の3名のヒンディー詩人(Rāmsahay, Jānī Bihārīlāl, Sukhdev Miśra)の著した韻律書の校訂を行う。ヒンディーの韻律論の研究はすすんでおらず、英訳されたものはない。そこで20世紀以前のヒンディー韻律学の権威とされたSukhdev Miśra(180.)の著わした韻律書 *Pīngala* には英訳を付す。

(2) 韻律定義の「暗号」解読と用語集作成：

韻律の定義はスートラ(暗記のための格言形式の規則)として簡略化するために、別の意味を持つ短い単語に置き換えて表現されている。この暗号のような用法にはヒンディー韻律独特のも

のがあり、一般に知られていない。そこで、詩論家が独自の規則で用いているものについて特にそれを解説し、それぞれの単語が表わす意味を用語集として作成する。韻律の定義を一次資料から読み解くために必要な知識である。

(3) 詩論書で定義された韻律についての考察：

ヒンディーの詩論家がそれぞれの詩形や韻律のリズムをどのように定義していたかについて考察し、その特徴と問題点を明らかにする。ヒンディーの詩論家は音節と拍と音韻に注目して独自の用語や定義方法で韻律を規定しようとした。詩論家がヒンディー韻律学をどのように定義し発展させたかについて考察する。

また韻律分析のために、パクティ文学と作詩法時代の文学作品を電子テキスト化し、ヒンディー詩論書の韻律定義部分に定められた規則と対照して検討する。

3. 研究の方法

(1) 写本の校訂：

ヒンディー韻律学の発展の歴史のなかで主要な作品と位置付けられる17世紀から18世紀の3作品(Rāmsahay著 *Vṛttatalaṅgini* と Janī Bihārīlāl 著 *Chandaprabhakarapīṅgala* と Sukhdev Miśra 著 *Pīṅgala*) を、これまで集めた写本のコピーにくわえて、インドの所蔵機関で写本をコピーまたは閲覧し、書き起こしと校訂を行う。その中でも最も詳細で資料的価値の高い Sukhdev Miśra (18世紀) 著 *Pīṅgala* に英訳を付す。ピンガラに代表されるインドの伝統的サンスクリット韻律書やプラークリットの韻律書とヒンディー韻律書との共通点と相違点に注目し、その独自性を解明する。

(2) 韻律定義の「暗号」解説と用語集作成：

上記の写本の校訂作業を行うなかで韻律用語を集め、その意味を記す。写本以外には Jagannāth Prasad Bhanu の韻律書の校訂本から用語を集め、ヒンディーの韻律書全般に通用する語彙集を作成する。なお、韻律書の著者が独自の規則で用いているものについては、それを解説する。

(3) 以上の2点の作業を通じて、ヒンディー詩論書の形成と発展について明らかになった発見を学会での口頭発表のうえで学術論文として成果をまとめる。

4. 研究成果

(1) 初期ヒンディー韻律書の写本の校訂

ベナレスの Nāgarī Pracāriṅī Sabhā 所蔵の Rāmsahay 著 *Vṛttatalaṅgini* と Janī Bihārīlāl 著 *Chandaprabhakarapīṅgala* の写本の書き起こしと校訂を行った。そこで明らかになった特徴としては、Rāmsahay (18世紀初め) はサンスクリットの韻律書から伝統的に用いられてきた分類法(均衡型、半均衡型、不均衡型)を採用していない点あげられる。また、定義は韻文で行われているが、補足説明は散文でなされていた。Janī Bihārīlāl (18世紀末) は、主としてモーラ韻律で他の韻律書に見られない新たな詩形 (*Prabhaviśāl*, *caṇḍmani*, etc.) を示している。彼も韻律の定義は *dohā* または *sortā* の2行詩で行っているが、補足説明に散文を用いている。

Sukhdev Miśra の韻律書 *Pīṅgala* を Nāgarī Pracāriṅī Sabhā (ベナレス) と Gaya 大学の2写本から書き起こし、校訂し、英訳を付けた。なお、当初予定していたのは2写本のみによる校訂本の出版であったが、本研究における現地調査で Miśra の写本は当初予定していた2写本以外にも同系列のものが見つかったため、英訳を付した校訂本の出版にはこれらの写本をさらに加えてより詳細なものにする必要が生じた。

(2) 韻律用語の語彙集を作成した。

韻律用語の語彙集作成の作業を通じて、韻律用語の使用方法が韻律書の著者によって異なる点が明らかになった。たとえば、Sukhdev Miśra は重音節に対して 9 つの韻律用語 (Nūpura, Rasanā, Cāmaro, Kaṅkana, Mañjīra, Kuṇḍala, Taṭaṅka, Hara, Valaya) を挙げ、状況に合わせて使い分けている。また、17 世紀の Sukhdev Miśra と 20 世紀の Bhaṇu では用語の使用方法が異なることが明らかになった。

(3) 本研究課題に関連して得られた知見を、口頭発表し論文を執筆した。

論文“The Metrical Style of Tulsīdās”では、ヒンディー文学史上最高の詩人とされる 16 世紀のトゥルシーダースの著した全 16 作品の韻律を分析し、4/4 または 3/3/2 の 8 モーラのリズムが 2 行詩 dohā にくわえて sohar という民謡のリズムを用いた詩形でも基本になっていることを分析した。

論文「ヒンディー詩における音韻的リズム」では、ヒンディー韻文におけるヒンディー語特有の音韻リズムについて、サンスクリットやプラークリット・アパブランシャとの相違点に着目して論じた。ヒンディー語が現代で短母音の a がアクセントをもたない音節で発音されなくなり、2 音節 2 モーラの (C)VCV が 1 音節 2 モーラの (C)VC に変化したことによって、新たな韻律リズムが生み出された点とその韻律分析を行った。

ヒンディー詩論書、特に韻律学の形成と発展について、“The historical development of Hindi metrical rhythm” (The University of Chicago Center in Delhi) と “The Rhythm of Early Hindi Poetry as Reflected in the Piṅgala Literature” (University of Warsaw) の口頭発表を行った。ヒンディー詩論書を著した初期の詩人たちが宮廷詩人であり、その多くが韻律以外にラサ論や修辞法や女性の分類等についても論じていることはよく知られるが、当時の宮廷では詩論の一部として韻律学が重視されていたことを新たに指摘した。特に Sukhdev Miśra の韻律書における特徴的な定義方法について論じた。これらの研究成果については論文を執筆して投稿した。

(4) 毎年夏に世界の古ヒンディー研究者と大学院生が集まり古ヒンディーテキストの講読会が開催され、ヒンディー韻律の講師をつとめ、本研究で校訂本を作成した Sukhdev Miśra の詩論書の一部を講読した。

古ヒンディーの多様な方言の韻文を韻律分析するために、ラージャスターニー文学研究者 Alexandra Turek (University of Warsaw, Poland) とカビール研究者の Jaroslav Strnad (Oriental Institute, Czech Republic) とともにテキスト講読の研究会を行い、そこで使用したテキストの韻律分析を行った。また、研究遂行のために古ヒンディーの韻文テキストを電子化した。これらの分析と電子テキストは、両研究者と協議のうえ、成果公開用のサーバーで公開するか、共同研究論文として発表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

長崎広子, 太鼓と女は叩くべし - 『ラームチャリットマーナス』の女性観, 印度民俗研究, 第 18 号, 49-59, 2019 年 03 月, <http://hdl.handle.net/11094/72057>, 査読無

長崎広子, ヒンディー詩における音韻的リズム, 南アジア言語文化, 第 9 号, 56-76, 2018 年 03 月, 査読有

長崎広子, ムガル皇帝アクバルとふたりのスールダースー聖者伝文学の記述をとおして,

印度民俗研究, 第 17 号, 43-63, 2018 年 03 月, <http://hdl.handle.net/11094/68346>, 査読無

長崎広子, アブドゥル・ラヒームカーンカーナー作『都市の輝き』 - ムガル帝国期の女の恋模様, 印度民俗研究, 第 16 号, 77-99, 2017 年 03 月, <http://hdl.handle.net/11094/60691>, 査読無

長崎広子, ベーニー・マードオ・ダース作『上人伝要解』(下), 印度民俗研究, 第 15 号, 37-62, 2016 年 03 月, <http://hdl.handle.net/11094/56215>, 査読無

〔学会発表〕(計 6 件)

Hiroko Nagasaki, The historical development of Hindi metrical rhythm, 2019 年 02 月, Seminar “The historical development of Hindi metrical rhythm talk by Professor Hiroko Nagasaki”, The University of Chicago Center in Delhi (India)

Hiroko Nagasaki, Braj bhasha—language and literature, Seminar on “The Dialects and Literature of Hindi”, 2018 年 12 月, 大阪大学中之島センター(大阪府)

長崎広子, 15-6 世紀のヒンディー・バクティ文学の思想と時代, 「近世南アジアの文化と社会: 文学・宗教テキストの通言語的比較分析」研究会, 2018 年 10 月, 東京外国語大学本郷サテライト(東京都)

Hiroko Nagasaki, The Rhythm of Early Hindi Poetry as Reflected in the Piṅgala Literature, 13th International Conference on Early Modern Literatures in North India, 2018 年 07 月 18 日, University of Warsaw (Poland)

長崎広子, ヒンディー詩における音韻的リズム, 日本南アジア学会第 29 回全国大会, 2016 年 09 月 25 日, 神戸市外国語大学(兵庫県)

Hiroko Nagasaki, Metrical Style of Tulsidas, 12th International Conference on Early Modern Literatures in North India, 2015 年 07 月 16 日, University of Lausanne (Switzerland)

〔図書〕(計 2 件)

Hiroko Nagasaki, “Duality in the Language and Literary Style of Raskhan's Poetry” In Text and Tradition in Early Modern North India, Oxford University Press, ISBN 9780199478866, 2018, 159-173.

Hiroko Nagasaki, “The Metrical Style of Tulsīdās” In Early Modern India: Literatures and Images, Texts and Languages, Xasia, ISBN 978-3-946742-45-6, 2019, <https://doi.org/10.11588/xabooks.387>, 289-304.

〔その他〕

長崎広子, ブラジ詩人たちの足跡, インド通信, 第 468 号, 1-3, 2017 年 10 月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長崎 広子 (NAGASAKI, Hiroko)
大阪大学・言語文化研究科・准教授
研究者番号: 7 0 3 6 2 7 3 8

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。